

竹內実

月持后酒食河脉其皓齒吳娃唱柳枝酒

無題故鄉歸雲遙夜口遙隔上夫

家門嬌女戴妝侍王樽忽憶情相焦土下作

云有限雖有胡王上遠鏡無來

魯代堵肉北迅新遂極周近視

烏鷺知不來迢迢牛効路其三世界有一又學

過翠何妨目脂頭抵當并證法其二可作續

秋管地父自又隨春火重會後永四首思作

中流橫眉冷對長江無雨子子子子子子子子

人志積眉冷對長江無雨子子子子子子子子

魯迅周辺



竹内実

竹内 実
たけ うも みのる

1923年 中国山東省で生まれる

1949年 京都大学文学部卒業

現 在 京都大学人文科学研究所教授

著 書 「毛沢東・その詩と人生」(武田泰淳共著, 文芸春秋)

「中国の思想」(NHKブックス)

「茶館・中国の風土と世界像」(大修館書店)

「魯迅遠景」(田畑書店)

ほか

魯迅周辺

定価2000円

1981年 4 月20日 第 1 刷発行

著 者 竹内 実

発行者 石田 明

発行所 株式会社 田畑書店

〒107 東京都港区赤坂4-8-19 表町ビル301号

電話代表03-403-5819 振替東京5-103763

印刷・文栄印刷 造本印刷・アジア企画群 製本・山本製本所

©1981

1098-980150-4429

魯迅周辺——目次

魯迅と柔石

- 1 城頭 変幻す 大王の旗 7
 - 2 上海、および朝花社 23
 - 3 包囲討伐のなかで 52
 - 4 党内闘争 88
 - 5 冷たい汚名について 122
- 魯迅周辺

魯迅とその弟子たち 157

民話と魯迅 163

魯迅と児童文学 183

魯迅「中国小説の歴史的変遷」について 190

魯迅故居を訪れて 208

魯迅の手紙 211

魯迅とゴーゴリ 二つの「狂人日記」 219

眉間尺のこと 229

革命史上の阿Q 238

魯迅「徐懋庸に答え、あわせて抗日統一戦線問題に関して」 244

魯迅における「敵」国防文学論争によせて 246

氷の下の焰 魯迅生誕九〇年におもう 254

『故事新編』における公憤と私憤 259

*

周作人の回想録 271

周作人と日本人 273

*

瞿秋白の墓 278

あとがき 301

人名索引(附・発音表記)

魯迅と柔石

1 城頭 変幻す 大王の旗

武田泰淳は、『風媒花』のなかにおいて、それを書きつぎつあった一九五二年（昭和二十七年）の同時代を刻みこみ、新宿二丁目の公娼街の女に、魯迅の詩、「慣於長夜過春時……」を墨痕あざやかに書かせた。

もとよりそれは、小説の絵そらごとであって、絵そらごととしても、たまたま、ストライキ決行中の、客のいないデパートで万引をつかまり、そんなことよりもっといい働き口がある、と養老院をぬけだしてきた老人にそそのかされ、一晚かぎりの娼婦になって金を手に入れようとした蜜枝が、嫖客が強いまま、「漢詩」を一首書いたまでのこと、猥雑な市井に発生した、偶然の事件にすぎない。

しかし、一編の中国革命外史といってよい『風媒花』に、魯迅の詩があらわれたそのことは、戦後日本の意識にとって、架空の事件ではなかった。中国が現実の革命過程の総体をもって、発止（はつし）！とうちこんだ楔（くさび）、そのうちこんだ衝撃自らの証しとしても、うちこまれた側が、衝撃からたちなおるための行為としても、魯迅の詩は、新宿二丁目といわず、日本のどこかで書きしるされなければならな

かったはずである。

戦争と革命、革命と反革命、日本と中国、朝鮮、台湾、そして嫉妬、愛情、右翼、PD工場の殺人事件。事件。論理。小説の登場人物は、おのがじし憑かれた対象としての「中国」につきうごかされ、朝鮮戦争による日本革命の緊迫を感じつつ、曼陀羅のようにくりひろげられる人間関係のなかで、「運命」をえらびとった。新宿の公娼街をおおう夜空に、それらが渦巻き、衝突し、散乱しつつあった破局の前夜、その下の暗い明るみにうかびあがるようにして、記憶力の弱い蜜枝という女が、トイレで化粧をなおし、コップ酒をあおって筆をとり、卓上にひろげられた日の丸の国旗の右肩に、まず「長夜」と書くと、あとは奇蹟の筆が、ひとりでに走った。

——長夜 春時を過すに慣れたり

婦を挈つまさえ 雛ひなを将ひきい 鬢びんに 絲しろきものあり

夢裏 依よ稀はらなり 慈母の涙

城頭 変幻す 大王の旗

蜜枝は耳鳴りと口のかわきをこらえつつ、もうろうとしてその意味も知らず、魯迅の詩を記していた。最後の一字まで。

——城頭 変幻す 大王の旗

看るに忍びんや 朋輩の新しき鬼となるを
怒りて刀の叢かたな しげみに向い 小さき詩を覓む
吟じ罢め 低眉ふしめになれど 写く処なし
月光 水のごとし 緋き衣を照らす

蜜枝が詩の意味を知らなかったことはたしかである。武田泰淳はつぎのように書いている。

それが魯迅の句であることも彼女は忘れていた。いま東京の城頭に、大王の旗が変幻しつ々あることも彼女は知らなかった。その詩句が妻子の睡しずまったあと、旅館の庭を徘徊する魯迅によって、悲痛の想いでまとも上げられたことも知らなかった。一九三一年二月七日の夜半から八日の晨に至る或る時刻に、魯迅を慕っていた青年文学者は処刑された。上海郊外、竜華警備司令部の一隅で、二十四人の若い仲間が銃殺された。魯迅は生き残り、彼らは人知れぬ地下に埋められた。英租界に逃れた老文人は、よき友が一人また一人と、新しき鬼と化して消えて行くのを、手をつかねて見守らねばならなかった。それらのことを、蜜枝は知らなかった。彼女の筆は、次第に大きさを増す墨文字で旗の全面を埋めつくそうとしていた。

誰かが書いた万歳や署名、中央の日の丸の赤い球の上にも、筆は遠慮なく進んだ。もはや誰ともめようとはしなかった。

寄せ書きの日章旗を展げ、ふつうなら墨でよごすまいとする赤い丸のうえにも、筆は走り、書きおえたとき、蜜枝の指は縄のように筆にからみついて、容易に、はなれなかった。極度の緊張は、墨の痕にもみえたにちがいない。魯迅の詩は、無方向、無目的、無革命の混乱のただなかにおかれながらそれらとあい拮抗してゆるがず、日章旗にじわじわと墨の色をにじませていたにちがいない。

蜜枝はこれが誰の作であるかを忘れ、「東京の城頭は、大王の旗が変幻しつつあることも」知らず、一夜を娼婦として稼ぎ、翌朝、下半身に異様な感覚を貼りつけられたようになって、夫のもとに帰っていった。その手は、無意識のオートマチズムによって、人びとの運命を暗示する文字を描く、こつくりの働きをしたにすぎないのだろうか。

そうだとすると、魯迅の詩は、蜜枝の頭脳の片隅にも、まるで潮がさすように及んでいる戦後日本の意識に憑りつつ、蜜枝の手を借りて、あらわれたのである。その場合、戦後日本の意識の、とりわけ中国指向の側面が凝縮して、魯迅の詩の出現をおしあげる作用を担ったことは、いうまでもない。架空の世界の絵空事ではあるが、絵空事とおして戦後日本の意識が示されたこと、そのことは歴史的にあったとしなければならぬのである。「文学集団」と「労働文芸」という、あい対立する二つの文学組織が『風媒花』にあらわれ、それぞれ別個に魯迅祭を開催する。戦後日本の文学によって、魯迅は二つに引き裂かれたのだった。

慣於長夜過春時

挈婦將雛鬢有絲

夢裏依稀慈母淚

城頭變幻大王旗

夜は長く、夜あけを待つのはつらいが、しかしその長い夜にも慣れて、春の季節が過ぎてゆくのを感じている。その春の季節に、わたしは妻や子をつれて、自宅を離れ、避難するのだ。もうわたしの鬢びんには、白い絹糸のような白髪がまじるようになった。夢のなかに、慈愛にみちた母親があらわれて声をしので泣き、涙をこぼした。夢からさめて、くろぐろとつづく城壁のうえに、大王を自称する人間の旗をみたが、その旗はたちまち別の人間の旗にとってかえられ、変幻交代するのだ。

忍看朋輩成新鬼

怒向刀叢覓小詩

吟罷低眉無写処

月光如水照緇衣

志を同じくした友人が、つぎつぎに新しい死者となるのをわたしは凝視し、しかも凝視するに耐えられない。そこで、雑草の叢くさむらのように多くの刃がわたしにむかってくる、その刃の鋭い尖端に、われとわが身をさらして、詩をもとめるのだ。勇ましいスローガンではなく、現実にたいして無力な小さな詩を。詩句が生まれると口ずさみ、またつぎの詩句を考え、さて口ずさむのをやめ、顔をうつむけ

て筆をとろうしておもった。言論の弾圧はきびしく、この詩を発表する場はどこにもない。月光のなかに立ちつくすと、黒い着物が、白く、水のように、光る。

ところで、一九六七年〔昭和四十二年〕に、武田泰淳は中国を旅行して、蜜枝が書いた魯迅詩の一句を、こんどは自分の手で書きしるした。それはもはや絵そらごとではなく、事実の次元であった。

——城頭変幻大王旗

北京で、博物館かなにかの展示を見たあと、自分の感想に代えて、右の一句を署名帳に記したのだった。その夜の宴会の席上、主人側の郭沫若は、はやくも報告をうけていたとみえて、挨拶のなかでそのことにふれ、自己の談話に援用した。『風媒花』に登場する中国文学者・Qとは郭沫若でなければならぬが、Qは、現実の世界では郭沫若として、魯迅の詩句を解釈した。いよいよ、事実の次元の出来事である。

署名帳に記入した人間もまた、事実の次元に立っている以上、蜜枝が魯迅の作と知らずに書いた私たちの虚構は成立せず、魯迅の作であると知って書いた意味になわなければならなかった。

武田泰淳はそのときの郭沫若の解釈に、なんらのことばをさしはさまなかったようである。だが、しかし、このときの「城頭」とに、もはや一九三〇年代の上海でも、敗戦後の東京でもない、歴史悠久にして、しかも革命を経た首都北京の城頭であることは動かしがたい事実であって、そこでは壁と

いう壁を埋めつくした大字報が、さらにあふれて巨大な城壁にまではいあがり、党や国家や軍の官僚、そして小説家や詩人や俳優や画家や大学教授らの思想的・政治的・道徳的腐敗を告発し、かれらを打倒せよ、打倒して悪臭を放たしめよ、と叫んでいた。「変幻す 大王の旗。」

郭沫若は、なにもいわぬ武田泰淳に向って、詩句の「大王」とは劉少奇であろうといった。——みよ、一時は勢いをふるった修正主義の旗がよろめいている。

だが、考えてもみよう。魯迅詩のそのつぎの行は、「朋輩」の死に対する哀惜の念を表白している。この時・この地・北京における「朋輩」の死とは、いかなるものであるか。

「朋輩」の死。

これは修正主義者としての死でなければならない。あるいは逆に、毛沢東主義者としての死でなければならない。「大王」が劉少奇だとすれば、「朋輩」、同志はアンチ劉少奇のはずであり、死者は毛沢東主義者に属するであろう。しかしながら、「大王」劉少奇が迫害した例、劉少奇に迫害をくわえられて、「朋輩」、同志が生命を失った例が絶無であったとはおそらく誰にもいえないにせよ、総体としての状況をみるなら、直面する激動のなかにおける死者は、修正主義者のレッテルを貼られた人間でなければならない。圧倒的な大字報によって、批判された側が、政治的な・あるいは、なま身の・死をとげ、「新しき鬼」となったのである。

それなら、そのような汚れた修正主義者、敗北者、死者は、ひとびとにとって「朋輩」か。そうでないはずはない。

しかし、その時・その地にあつて、「政治」は、そのような死者を、あえて「朋輩」と呼ぶものに

たいし、問責をくわえたはずである。死と詩、あるいは現実と詩が、つねに論理的な対応関係にあるとはかぎらないにしても、この詩のなかにおける「大王」と「朋輩」が、敵対的な関係におかれていることはたしかである。そして、現実もまた……。

そして、魯迅もまた、「大王」を敵とし「朋輩」を自己の分身とした……。だから、「怒りて刀かたなをしげみ 叢

に向い小き詩をもと覓」めざるをえなかった。林立する敵の刀にたちむかい、だが、武器をもたぬ徴力な、この詩の作者は、小さな詩をさがしもとめるよりほかはなかった。

一九三一年〔昭和六年〕二月の中旬、ある噂がひろまった。

——上海においてである。

……アカの文学青年がつかまったそうだよ。つぎは、あの魯迅がつかまえられる番だそうだよ。あるいは、つぎのような噂だったろうか。

……同志が逮捕された。つぎは魯迅先生だと、敵はいっている。先生があぶない。

柔石らが逮捕されたのは一月十七日のことである。その三日あと、一月二十日、魯迅は妻の許広平と息子の子海嬰をつれて自宅を出、日本人の経営する旅館兼下宿屋、花園荘に身をかくした。さらに十八日を経過して、二月七日の深夜、逮捕されたひとびとは、秘密のうちに銃殺に処せられた。

二月七日の深夜のそのとき、魯迅はかれらが銃殺されたのを知らなかった。知るはずもなかった。

魯迅が避難先きの旅館をひきはらったのは二月二十八日のことである。三十九日間、かれは潜伏していたわけであるが、馮雪峯は柔石の死が確認された数日後、魯迅を避難先きに訪ねた。魯迅の日記には馮雪峯の来訪は記されておらず、月日は確認できないが、そのとき、すでに魯迅は柔石の死を知っ